

小倉美恵子『オオカミの護符』(2011年)を読む

1. 小倉美恵子さん

- ・昭和38(1963年)年に川崎市宮前区土橋に生まれる
- ・2000年から自主的に地元「土橋」の映像記録を開始
- ・プロデューサーとして2008年に映画『オオカミの護符一里びとと山びとのあわいに』を公開
- ・明治生まれの祖父母は「百姓」と名乗る

「高度経済成長の恩恵に預かってきたが、何か大切なものを置き忘れてきたような気がする」

その「何か」に向き合おうと決めたとき、「我が家」の古い土蔵の扉に貼られた一枚の護符が目に入った

2. 「オオカミの護符」を追って

- ・「オイヌさま」と呼ばれる「黒い獣の護符」→武蔵國・大口真神・御嶽山
- ・土橋の御嶽講→里びとを山へ導く「御師」
- ・武蔵御嶽神社(東京都青梅市)の「大口真神祭」→大口真神=ニホンオオカミ

背景に縄文時代からのオオカミ信仰→「奥武蔵」へ

- ・宝登山神社(埼玉県秩父市)「谷ッ平講」の「お犬替え」→「お焚き上げ」という神事に会う
- ・猪狩神社(秩父市)の「奥宮祭」
- ・三峯神社(秩父市)の「御産立」

百姓とオオカミ、百姓と自然・風土との関わりが神事に先んじてあった

3. 「百姓」の世界「もうひとつの暮らし」

- ・藁葺屋根の家での祖母の「そら語り」
- ・「谷戸」「ハケ」「耕地」ひとの住む場所を指す地ことば→地縁血縁
- ・大山詣でと雨乞い
- ・太占祭
- ・焼畑

「お山さま」

「何々山ではなく、お山。個別の山を指すんでなくて、毎日お世話になっているお山。自然に崇めるような気持ちの言葉が「お山」だと思いますね」

「べーら山(雑木山)」

「稼ぎ」収入を得る

「仕事」世代を超えて暮らしを永続的に繋いでゆくもの

4. 足元を掘り下げる

「武蔵國」という言葉には関東の古層を呼び覚ます力がある

「首都圏」都心に向けて凝縮

「武蔵國」山に向かって柔らかく開けていく音がする

「戦後、私たちは東京に目を奪われて慌ただしく過ごしてきたが、祖父や祖母、そして武蔵國のお百姓は皆、山に気持ちを向けて生きてきた」(p.107)

「お山」は文化の発信源

「きっと私たちの感覚の中にも、とてつもなく古い暮らしの中で培われたものが眠っているに違いない」(p.180)

「土地の自然と向き合い、神々を祀ってきた人々の言葉や姿には、未来を指し示す手がかりが宿されているはずだ」(p.196)

● 「足元(=自分の住んでいる土地)を掘り下げる」とは？

「必ず心に触れるものに出会えるに違いない」(p. 201)